



加藤多一

(かとう たいち)

1934年北海道に生る。  
日本児童文学者協会評議員、現在稚内北星短  
大教授。  
関心分野は文学と人間  
と環境との共生。

# 手をかけない魅力

—メグマ沼を歩いてみた—

加藤 多一

原稿依頼があったときは、気が重かった。自然保護についても自然研究についてもシロウトなのに、どうかげばよいのかー

そのうち、気がついた。メグマ沼に最も近いところに住む会員が私かなーとすれば、書く責任があるかもしれない。

△今年はじめてのキトピロ▽

私が住んでいるのは、稚内市大字声間村字恵北という集落で、真北にある空港やメグマ沼まではざつと五キロメートル。自転車で行ったことはある。

今日は合い棒(家人)がいるので歩いてみることにした。

真夏を除いては年中使用しているゴム長ぐつ・軍手・ヤッケ・毛糸のぼうし・オーバースポーンこういうもので身を守ると、冷い風も湿地も平気で、どこまでも歩いていけそうな気持ちになる。試してみたくなる。

(最新殺人装備を完了した軍隊の幹部の気持ちを類推することができる。裸のサルから万能な人間への

飛躍が恐ろしい)

日時—一九八九年四月十五日(土)午後二時十八

分出発

天候—くもり、北西の冷たい風

(環境保全問題が地球的規模で現出している国際化社会において“平成”でもあるまい。便宜的に西暦を使うが、できれば反核〇年あるいは大気保全〇年がふさわしい)

あと半月で切り捨てられる「天北線」のディーゼルカー(音威子府発稚内行)を見送ってから歩きはじめる。

駅裏の広大な湿原・笹とヤチダモの元湿原、反対側の酪農地帯、どこを見ても緑色が目立たず、灰色または茶色の景が続く。

十分歩くと、N牧場の堆肥の匂い、ミズバショウ場につき当る。ここの家のクミちゃん(小学校五年生)の姿をさがしたがいない。

ミズバショウが異様に小型だ。今年は雪が少なく雪どけ水もわずかなせいで。そのかわり、キトピロ(ギョウジャニンニク)・イラクサ・アザミを発見。

今年初めての第二農場の収穫物として採取。家裏のせまい第一農場にはまだエンドウ豆をまく時季にもなっていない。

すぐに道路からそれで牧草地に入る。排水溝のへりを歩かせてもらうと、メグマ沼への近道になった。

丘陵地にさしかかる道路に立看板あり「稚内市メグマ沼自然公園入口」

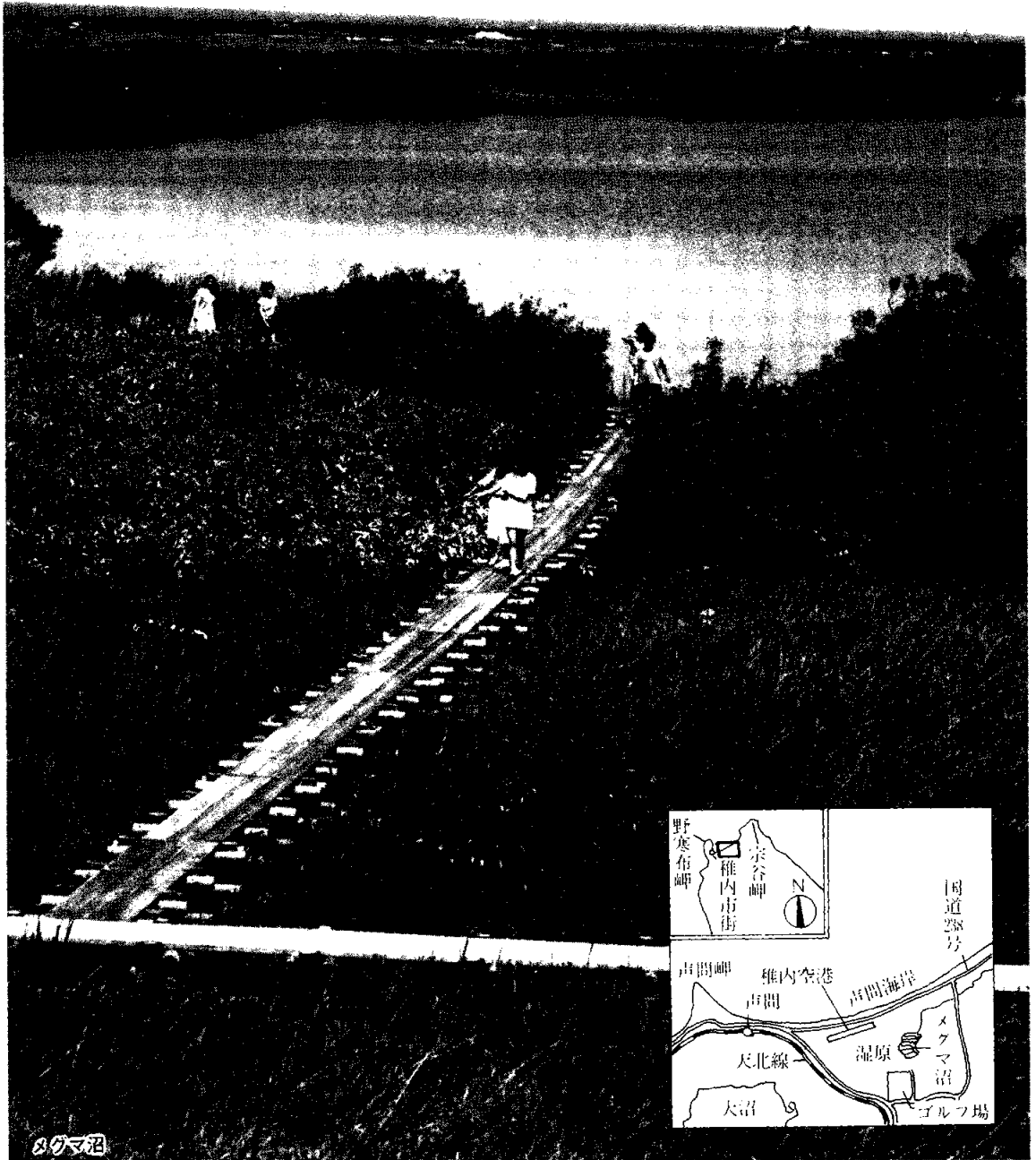
登っていくといきなり道路が地平線上でカーブする地形、そのむこうに銀ネズ色の水面が現われた。メグマ沼である。

△資料▽

メグマ沼(一九七九調査)、N45°24'・E141°49'、水面標高5M、面積〇・二五km<sup>2</sup>、最大水深一、八m、平均水深一、五m、湖岸線延長二km、水の色は淡褐色。

「北海道自然百選紀行」(北大図書刊行会)には、次の記述がある。

「メグマ沼とその周辺の“自然”を大いに活用しよう」と稚内市はジェット機就航にあわせ、五九年度か



からメグマ沼を中心に、自然公園にする事業を進めている。沼ペリまで延びる木道はその第一弾。自然を最大限に生かすにはどうしたらよいか。市は大植物園長辻井達一教授に湿原の植生調査を依頼。木道工事を担当する市都市計画課の中島一喜課長は「助言をもとに、湿原の多様な植物が見られるようルートを設定。湿原を荒らさぬように、積雪期に工事をした」という。将来は総延長二、五キロ、空港ターミナルビルまで延ばす計画だ。」

△木の道の魅力▽

まず沼を東に見て立つ。やや茶色の混じった鉛色の水面に、風が筋を作り、そこから冷たい風が吹きつけてくる。目の前にゴルフ練習場。うしろに今日オープンゴルフ場。左手に宗谷海峡の波がうねっている。

玉ころがしに全く興味を感じない人間と、花もないの沼を歩くなんて考えられない人々が、一瞬すれちがった。趣味が違ふけど、人口が少ない土地のせいかな、人なつかしい感じもありー

西側から沼に降りていく。しつかりとした標示あり。横書き。

「メグマ沼自然景観保護地区/昭49・3・30指定/北海道/メグマ沼は海岸線の後退と砂丘の発達において形成された海跡湖です。面積は25ha/平均水深は15mで、フナ・コイ・ドジョウ等の魚類が生息/コガモ・マガモ・カルガモ等の水鳥が見られます/沼の周辺には、ヨシ・水バショウ・エゾカンゾウ等を主とする湿原が広がり、前方のカシワ・トドマツ/風衝砂丘林や静かな水面とあいまって小規模ながら北国特有の茫洋とした風影をつくりだしています。」

木道がいい。

厚い板を三枚並べた「人間の道」は豪華でさえある。いや人間だけでなく、キツネや野鳥も利用するのか、白く乾いたさまざまのふんがある。

ここはまだ浅春、ミズバショウがちらほら見えるだけだ。植物にはしっかりと説明板がついていて親切だ。エゾカンゾウ、ヒオウギアヤメ、ミズゴケ、ツルコケモモなど説明板だけを見ながら、頭の中に花を咲かせてみる。

この取材のおかげで初めて木道の終点まで行ってみることができたーそれを喜びながらも、これ以上木道のルートが増加しないことを望んだ。

このことを帰ってから稚内市役所都市計画課の中島さんに聞いてみる。「延長三キロでもうやめます。野性を残したいからー」気持ちが出る。

この木道とメグマ沼の魅力だけでも稚内市民であることの喜びがある。

△苦惱をこえて▽

ヤチハンノキが水辺に立っているが、その姿勢が痛々しい。折れまがり、ねじくれた自分と戦いつつなお太陽めざして伸びようとすする北辺の樹よ。傷なきものを、だれが幸福と呼ぶことができようか。

生きていく限りは、逆境と苦悩を越えていくことが当り前のことなのだーヤチハンノキは、このように私を打った。

すばらしい木道にも終りはある。終点に標示あり「国道二二八号まで一、三キロメートル」

右手(東の方)に矢印がついているので、それを見て進んでいった。

一度笹を刈ったのか、丈が低い笹の道は進むうち

に、道は原野に溶けてしまった。どうしようかと考えて、ともかく泥炭地の上に乗る。およそ五センチほどのクッションがあつて温い。

この温きこそは、千万の植物と動物の死骸の累積ではないのか。背骨のあたりで、ヒト科・ヒト、俗名カトウタイチの死骸予定物が密着して溶け合おうとしている。

完全に溶けるまでもうちょっと時間をくださいーそう思つて歩き出した。笹が深くなり、遅れてついてくる合い棒は、首しか見えぬ。

ヤチブキの群落に嘆息をあげたあたりで、完全に道を失った。あとは、海岸沿いの国道の車の音を頼りにするしかない。

ーそして、国道にたどりついた。途中で雨にもぬれてひどい目にあつたけど、△コースを整備せよ▽なんて絶対に言いたくない。



子供達の観察会風景